校長室だより～燦燦～ №２７

トランヴェール

2019.12.17

ＪＲ東日本、東北新幹線の車内誌である「トランヴェール」には、毎月、角田光代さんが取材した記事が載っている。角田さんの代表作といえば『八日目の蝉』『紙の月』『対岸の彼女』だろうか。以前は、トランヴェールに角田さんのエッセーも載っていた。伊集院静さんとはまた違ったよさがあり、なかなかよかった。

角田さんは、もう２年近く、トランヴェールに東日本大震災で被災した地域の取材記事を載せている。最初は、震災の１か月後に新聞記者とともに三陸地方を訪れたそうである。それ以来、ずっと東北地方に通っている。

２０１１年の４月、東日本大震災の１か月後に、新聞記者とともに三陸地方を旅した。その光景を見て、新聞に記事を書いてほしいという依頼を受けたのである。そうすることにひどく戸惑いながらも、承諾し、震災がめちゃくちゃな傷を残した町を、ただ呆然と歩いてまわった。

その後にまわった気仙沼、女川でも、仮設店舗で営業している屋台街、飲食街、市場がよくあった。立ち寄ると、どこも活気があった。あるいは、私の目はそういう店や、店の明かりばかり、さがしていたのかもしれない。飲食を扱う店が戻ってきて、活気がある、ということは、本気で町が立ち上がったということのように、私には思えるのだ。その土地のものを食べること、飲むこと、集って酒を酌み交わすこと。そうしたことが、栄養とはまたべつの、私たちを生かす力となるのかもしれない。

車に乗って移動中、窓からある看板を見つけた。雪の積もった空き地に、手書きの看板が立っている。「ご支援ありがとうございます。いつかかならず恩返しいたします。気をつけてお帰りください」と、そこには書かれていた。その気遣いに、胸に明かりが灯ったような気持ちになった。

これが角田さんの文章である。角田さんの被災地への思いである。角田さんは、福島にも来てくださっている。

昨年、当時大学３年生だった息子が海に行き、スマホがなくなり、地元の警察署に届けたというので、仕方なく女川方面に向かった。眼前にあったのは、私が思い描いていた町ではなかった。町は新しい施設が立ち並び活況を呈していた。これが復興というものか。角田さんの文章を読んでいた私は「こういうことか」と納得させられた。後日談だが、息子のスマホは海から出てきたそうである。届けた警察署から連絡がきた。この時代に、海から出てきたスマホを警察に届けてくれる方がいらっしゃる。電源も入ったそうである。しかし、すでに息子は新しいスマホを購入していた。保険に入っていたのがせめてもの救いであった。結局、彼は懐を傷めずに新品のスマホを手にすることになった。人騒がせな男である。

トランヴェールは、ここ数か月読んでいない。８月を最後に、東北新幹線に久しく乗っていない。だが、私のトランヴェールは、ちゃんとしかるべき所に保管されている。私はそれを取りに行くだけで新幹線に乗らずとも読むことができる。それも昨年度までの同僚であるＷさんのおかげである。しばらくの間、彼は毎月１日になると、私にトランヴェールを届けてくれる役目を自発的に担ってくれていた。私が彼の職場を離れても、ちゃんと毎月私のトランヴェールを取っていてくれたのである。うれしいではないか。もうすぐ仕事納めである。そろそろ受け取りにいかなければ。